

まだ見ぬ出会いを
求め、山に登る!

かつまた ひろき
勝亦 浩希 さん



ペルーアンデスの
チョピカルキの山頂にて



↑モンブラン山群 (フランス)
レ・クルト山頂付近にて

5月にオープンを迎える道民の森。神居尻地区では、毎年林道や登山道など未舗装路を走るトレイルランの大会が開催されています。今回は過去に過酷なトレイルランの大会で2位に輝くなど、山をこよなく愛する勝亦浩希さんに山にかける思いを聞きました。

自由な登山を求めて世界へ

静岡 県で生まれ育ち、子どもの頃から家族で登山をするなど、昔から山とは縁がありました。母が図書館で借りてきた写真集などに影響され、北方の自然への憧れを抱くようになり、北海道大学に進学して山岳部に入りました。山岳部では登山道もない深い山を活動の中心とするため、独特でした。例えば夏季休暇には沢から沢へ登り下りして1〜2週間歩きます。そのため最低限の荷物だけを持ち、足りないものは現地で工夫して調達します。重い荷物を持ち歩いては機敏に動けずかえって危険ですので、原始的ですが合理的な手法です。GPSにも頼らず、紙地図とコンパスだけで自由にどこへでも行け

る登山に魅了されました。国内の山だけでは満足できず、アンデスやヒマラヤ、アラスカなど世界の鋭鋒にも登りました。

衝撃を受けたトレイルラン

友人 に誘われ初めて出場したトレイルランの大会では、何とか完走できましたが、大会が終わった後4日間は全身の痛みが引かず、日常生活もままならないほどでした。今までの登山では味わったことのないもので、とても衝撃を受けました。その後、独学でトレーニングを続け、2016年に行われた「北海道トレイルランニング大会 in ルスツ」で83.3km、累積標高差5,215メートルを13時間かけて走り、2位になることができました。30歳台にもなってこのような体験ができるなんて若いころは思っていませんでした。シビれましたね。

一つ一つの山が大切な思い出

時間 を競う登山も楽しいですが、やっぱり自由に山で活動するのが一番好きで

す。十勝連峰の端から大雪山の端まで18時間で走り抜けたり、15日間かけて雪の日高山脈全山を縦走したり、誰にも登られていなかった冬の岩壁や大氷柱を初登攀したこともあります。普段のちょっとした山でもふと、「山は最高だな!」という思いがこみ上げ、すべての山の思い出が大切なものになっています。その時々自分と仲間と、振り返るとどれもが生涯一度の登山でした。



最近では二人のお子さんと一緒に登山をしており、子どもたちはいつも予想以上の反応をしてくれ、また連れて行きたくなるのだとか。まだまだいろいろな山に登り、格好よく人生を楽しむ父親の背中を見せたいとお話してくれました。(4月9日取材)